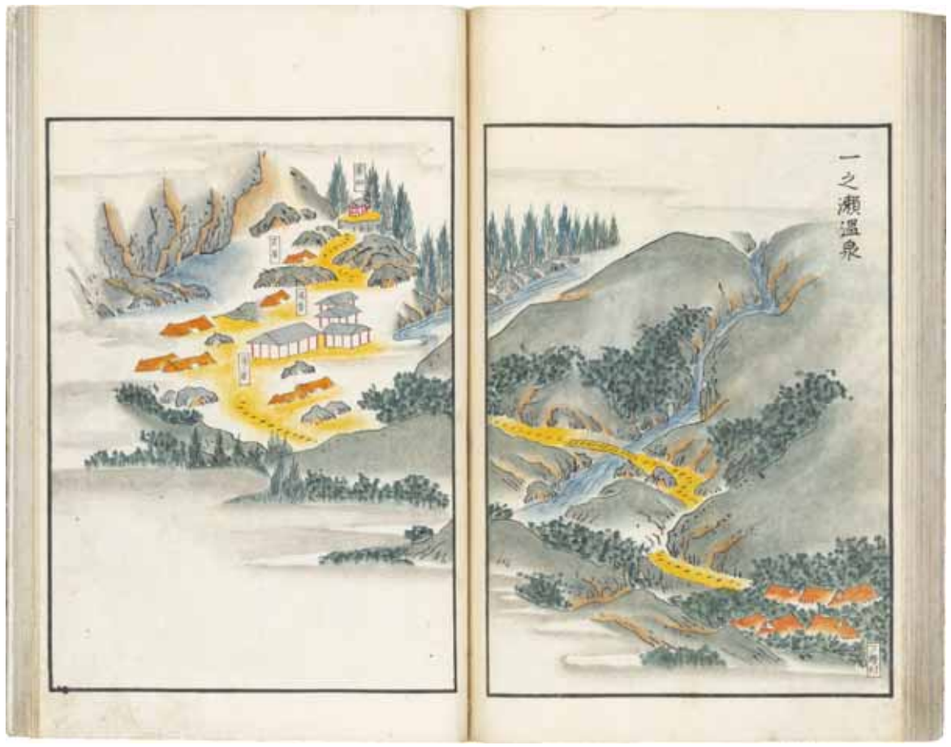
「白山紀行」の広がり

福井藩士井上翼章が著した「越前国名蹟考」（1815年）では、白山麓の村むらの解説に「白山紀行」がたびたび引用されています。これは17世紀後半の福井藩儒官、野路汝謙が「勝山より牛首通三山巡礼し、別山より石徹白へ下」った旅を記したものとされていますが、残念ながらこの紀行は現在に伝えられていません。

1829年（文政12）には、十辺舎一九の晩年のロングセラーとなった『方言修行金草鞋（むだしゅぎょうかねのわらじ）』（全26編）の第19編として「越前のかたより詣たる」「白山参詣」の巻が刊行されました。このシリーズで、一九は、様ざまな紀行を参照しながら、虚構性のある滑稽話から実用性の高い道中記的な作品へとその作風を変化させていったとされます（中山尚夫『文学論藻』76）。

一九没後の1834年（天保5）まで出版され続けたこの『金草鞋』シリーズの読者層の広がりと、「近来白山禅定之人多く一之瀬入湯の人も次第に繁昌」（「続白山紀行」）という白山麓風嵐の村人の言葉をあわせてみると、19世紀に入った頃には、白山参詣・市ノ瀬湯治に訪れる人びとは確実に増えていたといってよいでしょう。ここで取りあげる「白山全上記」（p.8～p.9参照）「続白山紀行」（p.10～p.11参照）が、これも現在では知ることのできない「菊翁子（山田氏）ノ紀行」「渡辺君祐尚の筆記」（渡辺祐尚は福井藩士）を引用していることからも、この時代には多くの白山登山の紀行が知られていたことがわかり、白山参詣とその紀行の広がりが推測されます。



■ 井上翼章「越前国名蹟考」 1815年（文化12）
松平文庫　福井県立図書館保管